

平成28年度 愛媛県議会 地域の声を聴く会

県議会では、議会基本条例の趣旨にのっとり、広報活動の充実を図り、県民に開かれた議会活動を推進するため、平成27年度から、「愛媛県議会 地域の声を聴く会」を実施し、県民に議会（委員会）の取組みを紹介し、議会（委員会）活動に対する県民の理解促進を図るとともに、地域で県民の生の声を聴き、地域の現状と課題等を把握することとしております。

今年度は、下記のとおり総務企画国体委員会を除く5委員会で実施し、地域代表者の方からは、多くの貴重な意見をいただきました。

環境保健福祉委員会

開催日	平成28年7月12日（火）
開催場所	高齢者在宅複合型施設プラチナガーデン
テーマ	福祉の現場を取り巻く現状と課題について
参加者	<p>地域代表者</p> <p>社会福祉法人はびねす福祉会 理事長 長野 文彦          社会福祉法人はびねす福祉会 理事 田村 浩志          特別養護老人ホーム豊園荘 施設長 森 仁          特別養護老人ホームふたば荘 施設長 白石 正</p> <p>環境保健福祉委員会委員          建設委員会委員（オブザーバーとして参加）</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <p>・私どもの業界が抱える問題は多々あるが、一般的にはやはり介護サービスに係る人材の問題がある。目に見えない部分で日本の介護力の水準が低下しているという事実がある。それに加えて、国が進めているCCRC構想、高齢者を地方へ移そうということだが、これを実現することは、なかなか難しいのではないかと。人口減少の圧力は、世界の例を見ても簡単に跳ね返せるものではない。</p>

- ・社会福祉法人を経営する上で重要なことは、まずトップが自分の考え方をいかに徹底できるか、かつ現場を重視した対応がいかに素早くできるかということがなくてはならない。また、現状に満足せず絶えず改革していくという経営改革や情報収集が必要であるということを感じている。法人といえども甘えは許されず、いつの時でも自分で立っていく力を忘れないということが大事である。
- ・福祉・介護従事者不足が言われているが、本当に新居浜では介護従事者、特に若い年齢層の従事者が集まらない。介護人材の確保対策として外国人労働者に頼らなければいけないと言われてきてEPA制度ができたが、県内で取り組んでいる施設はほとんどない。また、もっと行政が、数十年後の将来を見据え、高齢者が安心して住めるまちづくりを進めていくべきではないかと思う。
- ・現場の問題でやはり一番深刻なのは人材の確保である。この点で、平成27年度の介護報酬改定で新設された処遇改善加算を全職種に適用させてもらえたら、もっと有効な施設の活用ができる。また、国の施策と現実との乖離がものすごく大きく、理想としてはわかるが実現可能かといったら難しいという印象である。政策を決定する際にはもっと現場を見て、理解してもらえたらと思う。

#### 質疑応答

Q はびねす福祉会では、国のEPA制度を活用し、外国人労働者を受け入れていると聞いているが、現状はどうか。

A 現在、約50名の外国人労働者を受け入れているが、全体の職員数からすると、100名規模で外国人の方に助けてもらわないと、当福祉会の介護レベルは維持できないと思っている。

なお、外国人労働者イコール低賃金労働者という考えは間違いで、私たちのお手伝いをしてくださるのであれば、給与面等で日本人と同等の環境を整えなければならないと考える。

Q 介護に関わる人達の給与面等の処遇はどのように決められるのか。

A 施設を経営する上で、将来のことも考えて、使う分と貯める分

の両面を考えていかなければならないが、現実からすると、今の報酬体系では給料は上げられない。上げたら倒産の可能性もある。もし平成30年度の報酬改定で下げられたら、本当に倒産するところが確実に出てくるというのが現状である。

愛媛県の給与水準は正直低いと思うが、先のことを考えたら上げられない。

Q 人口減少が見えている中、今後のまちづくりを進める上で、行政と介護に関わる法人には、どういうあり方が求められると考えているのか。

A 行政と法人の連携という部分で、最大のチャンスとなるのが地域包括ケアシステムの構築である。これがきちんとできれば、認知症高齢者の生活を支える地域が実現すると考える。

そのためには、県が各市町に向けて、県独自の実質的、現実的、具体的な方策を示すことができれば、愛媛モデルと言われるものができると思う。

総括（高山環境保健福祉委員長）

大変厳しい状況である介護人材やそれに伴う給与待遇など、難しい問題は限りないものがあることがわかった。

引き続き、CCRC構想や地域包括ケアシステムの構築など、愛媛県での環境づくりにご努力いただきたい。

会議の様子





## 農林水産委員会

開催日	平成28年7月15日（金曜日）
開催場所	県農林水産研究所 水産研究センター 本館3階大会議室
テーマ	スマを中心とした本県養殖漁業の現状と課題について
参加者	<p>地域代表者</p> <p>(株)グリーンエンタープライズ 代表取締役 深堀 毅          愛南漁業協同組合 事業部長 藤田 知右          愛媛大学 社会共創学部 教授 松原 孝博          (株)山木産業 代表取締役 山木 光広</p> <p>農林水産委員会委員          経済企業委員会委員（オブザーバーとして参加）</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スマについては、いやしの南予博の開催に合わせて提供しているが、本格出荷後、どれくらいの方がリピーターになってもらえるかが課題。</li> <li>・県外に出荷するに当たり、まずは県内での認知度向上のための様々な取り組みを行っているところ。</li> <li>・養殖はブリと真鯛が主力であるが、この2種に頼りすぎているため、将来的には儲けが大きく、広く流通するものが養殖できればと考えている。</li> <li>・スマは成長が早く、生産者としては非常に魅力のある魚。</li> </ul>

質疑応答

Qスマの養殖に関し、今後追いかけてくるライバルとの差別化をどのように考えているか。

A本県が独走状態である状況を利用し、技術の囲い込みや知的財産に係る条件を整えるなどにより、ここ3年間くらいで技術的優位を確立しておく必要がある。

Qスマは赤潮被害の対象魚種に含まれていないようであるが、赤潮対策に関する取り組み状況はどうか。

A流通量や出荷量が多くなると、声が汲まれやすくなるので、独占状態である愛媛県から声を上げる必要があると考える。

Q「伊予の媛貴海」のブランド名では消費者に分かりにくいのではないか。

A県内では一定の認知度を得ているが、県外で得るには工夫が必要である。今後5年くらいは高級品志向で行く予定であるが、この間にブランド力をきちんと身に着ける必要があると考える。

Qスマについての今後の長期的な展望はどうか。

A7年後ぐらいに20億円、本県養殖生産高の3～5%くらいを目指している。

総括（木村 農林水産委員会 副委員長）

本県の養殖業の課題と現状についてということで、本日は研究開発、生産、流通、販売とそれぞれの立場から貴重な意見を頂戴しました。我々も県議会の中で、本県の養殖業の発展に向けて取り組んでいきたいと考えておりますので、今後ともご協力をお願いしたい。



## 会議の様子



## 経済企業委員会

開催日	平成 28 年 7 月 14 日 (木)
開催場所	松野町山村開発町民センター
テーマ	地域資源を活用した地域経済活性化の取組みについて
参加者	<p>地域代表者</p> <p>株式会社フォレストキャニオン 事務局長 石川 雄一          松野町地域おこし協力隊 隊長 矢間 大藏          メルカドデザイン 代表 市毛 友一郎          森の国まきステーション 代表 谷 清          松野町役場 森の国創生課 主 幹 井上 靖</p> <p>経済企業委員会委員          農林水産委員会委員 (オブザーバーとして参加)</p>

質疑内容

地域代表者からの声

- ・キャニオニングをしに松野町へ来られた方に、どこから来てどこへ行くかについてアンケートを取っているが、「道後温泉」が圧倒的に多い。しばらくはこの状況が続くと思うが、今後は、内子町から南の地域に、宿泊してでも行きたい魅力のある場所を作っていないと今の人の流れは変えられないと思う。小回りが利くこの地域のメリットを生かし、道後がうらやむような観光地づくりができれば面白いと思う。また、キャニオニングという仕事を通じて再認識した松野町の自然の素晴らしさを、県外から訪れるたくさんの方々へ伝えていきたい。
- ・松野町は、四国の南西部の中心に位置しており、太平洋にも行ける、四万十川へ泳ぎに行くこともできる、宇和海で釣りをすることもできる。こういった魅力がまだまだ周知されていないので、これから広く発信していく必要がある。
- ・松野町に限らず、宇和島市などでも、シャッター商店街が増加している。もともと移住者の中には、スキルを持っていて商売をしたいと思っている人も多いと思うので、「うちの町に移住すれば、商店街にお店が出せますよ」といったことを行政等から提案していただければ、商店街の活性化をはじめ、人口減少問題、移住の促進にもつながっていくと思う。
- ・松野町には見たことも聞いたこともないような地域資源がたくさんあるので、そういったものを少しずつPRしていくことが大切であると思う。
- ・現在、道後温泉から松野町、内子町、愛南町へという人の流れがあるので、道後温泉と各地域で連携して、セカンドターゲット的なものを観光客に向けて設定してあげれば、観光客にも喜ばれるし、道後温泉にもさらに付加価値が加わると思う。
- ・当時、松野町は、森の国という名前がついているのに、整備された森もなく、本当に森の国なのかという思いがあった。切り捨てられ、みすみす山に捨てられる木が多いことをどうにかならないものかと感じていた。森の国まきステーションでは、捨てられた木材を有効活用して地域経済を活性化させる事業を展開している。

・役場は、みなさんがやっているビジネスをどうつなげるかを考えている。過疎・高齢化、就職先がないというような課題を、観光を切り口に解決していこうとしている。

それにはサイクルが必要で、まずは、豊かな地域資源の発掘、住民の誇りと愛着、豊富な人材を育てることが必要で、次に、これを「活かす」ものとして、住民の参画、役場の調整機能、観光まちづくりプラットフォームの構築などが必要であると考えており、今、松野町はこの段階にいる。

次に、「広げる」ものとして、交流による自らの生活文化の向上、本地域のコアなファンづくり、森の国まつのおんげの結成などを行い、やはりご飯を食べていくことが出来なければ、地域は前に進めないで、「集まる・稼ぐ」ものとして、ご飯を食べていけるようなことをやっていく。キャニオニングは、昔は滑って遊んでいただけのものであったが、ガイドを付けてお金をいただく。現在、松野町には2社あり、バイトを含めると約20～30名の従業員がいて、生活ができるようになっている。

これらをどんどんまわしていくというのが役場の役目で、現在みなさんとともに頑張っている。

#### 質疑応答

Q 松野町に四国中央市新宮町の「霧の森大福」のような、人を呼べるヒット商品を開発するような戦略はないか。

A

・色々な意見があると思うが、そういったヒット商品のような、一つのものに脚光が浴びていないところが松野町のいいところだと思っている。

先般の自転車レースのプレ大会において、参加者から松野町の林道は最高ですねと言われた。我々からすれば、車で行くのも怖いような林道が参加者には最高と言われる。

そういうことが起こりうるのは、松野町が地域資源に恵まれているという証拠。

皆さんに愛される場所を少しずつ作っていき、知る人ぞ知るといって話に展開していくことがかっこいいし、町のために



もいいことではないかと思っている。

- ・「霧の森大福」は、無理に作り上げられたものではない部分が、多くの人から愛されていると思う。ただ、それはいろいろな要素が複合的に折り重なった、かなり偶発的な出来事だと思う。ヒット商品を作ろうとしても、どうしても無理やり作った感の方がお客さんに伝わってしまい、なかなか成功しづらいものである。

新しいものを作り上げる前に、松野町には、今あるもので地元の人しか知らない魅力ある地域資源がたくさんあるので、それを一つ一つ紹介していくだけで、観光資源につながっていくのではないかと思う。

Q 松野町は観光やまちづくりで成功している事例だと思うが、その背景にあるのは、松野町の風土なのか、それとも人口規模なのか。また、行政のかかわりはどうか。

A

- ・行政の支援は非常に大きい。
- ・松野町は、地元以外の人間を温かく迎え入れてくれる。  
また、合併しなかったメリットの一つだと思うが、役場の意思決定のスピードが非常に速い。
- ・東京に住んでいた頃は、そもそも自治体から仕事を依頼されるようなことはありえなかった。自治体の力になれることがあるなら手伝いたいと思えるのは、この人口規模だからこそ。
- ・森の国まきステーションでは、対価として半分は現金、もう半分は商品券で支払っており、これを松野町内で契約している散髪屋、酒屋、コンビニで使えるようにしている。このように松野町の中で、ものを循環させることが地域経済活性化のためには理想的なことではないかと思う。
- ・現在の松野町の人口規模は、特色ある地域産業を打つにはちょうどいいサイズである。町民のすべてが見えるので、ピンポイントで施策を打つことができる。また、成功者には徹底的に支援し、店舗を持った事例もある。地域経済を活性化するにはいいサイズであり、サイズというのは非常に重要な要素であると

考えている。

役場としては、思いついたらすぐに施策に乗るということを魅力にしており、スピードを非常に重視している。

そして、なによりも最も大切にしているのは「人」である。

#### 総括（西田経済企業委員長）

私は合併前に町長をやっていたが、合併後は決裁に時間がかかり、なかなか予算化もできない、住民の思いが形になりにくくなったと感じた。これは合併のデメリットとしてよく言われることである。私は大洲市であるが、大洲市にも合併前の河辺村とか肱川町など中山間地域と呼ばれるものがあり、そこには松野町と同じようなテーマがあると思う。松野町の行政の手法が素晴らしいと思うのは、ウェルカムという姿勢で、それぞれの分野の方に活躍の場やチャンスを与え、抵抗なく入れる感じにしていること。いろんな経験をもった、あるいは、個人個人のフィールドをもった方が集まって、さまざまなことをやっている。本当に素晴らしいと思う。地域経済やまちづくりの活性化を現在のような形で実施されることは、非常に期待感が強いので、今後ともぜひ頑張っていたきたい。

#### 会議の様子





## 建設委員会

開催日	平成28年7月12日（火曜日）
開催場所	県立とべ動物園 動物ふれあいセンター2階 視聴覚ホール
テーマ	県立とべ動物園の利用促進について
参加者	<p>地域代表者</p> <p>NPO法人 園でピース 代表 木村 和代</p> <p>愛媛動物友の会 会員 小林 弥生</p> <p>愛媛動物友の会 会員 脇田 久美子</p> <p>愛媛動物友の会 会員 石田 裕美</p> <p>松山市NPO登録団体 かぐや媛 代表 山岡 ヒロミ</p> <p>愛媛県地域活動連絡協議会 会長 村上 明子</p> <p>建設委員会委員</p> <p>環境保健福祉委員会委員（オブザーバーとして参加）</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>動物園の利用促進のカギは国際交流であると感じている。去年、アラスカ動物園ととべ動物園をつなぐことができたが、その際にアラスカ動物園からホッキョクグマ舎の広さの改善要求があった。ホッキョクグマの孤児の保護を日本と連携して行うためにホッキョクグマ舎の改築は急務である。獣舎の改築をしても、途切れることなく動物が次々と入って</li> </ul>

こなければ投資が無駄になるが、そういう意味でもアラスカとの交流は重要であると考える。

- 子育て情報誌「こねっと通信」にとべ動物園に関する情報を掲載しているが、その際には、大人が楽しむための情報発信を心がけている。とべ動物園は、全国から注目される動物園であり、観光資源として非常に有力であると思う。また、とべ動物園は飼育・繁殖技術が高く、国内に30頭余りしかいないアフリカゾウの繁殖に期待が高まっている。アフリカの生息域でも絶滅の危機に瀕しており、動物園での生息域外保存が非常に重要である。とべ動物園ではメスの群れが成立しており、オスをぜひ入れてほしいが、話があった時にすぐに受け入れられるよう体制作りが大事である。また、援や砥愛が将来出産できるよう獣舎を整えることも必要だと思う。
- 最近では職員の方々の来園者に対する態度が非常に良くなったと感じる。前園長の努力が現園長で花開いたのだと思う。職員が家族のように動物に接しているのも印象的である。動物園の動物をみていると癒しや活力をもらえる。いやなことがあっても見ていると優しくなれる。子どもたちにも見てもらって、優しい子に育ってほしい。
- 動物たちが生き生きと幸せに暮らせるとともに動物園の良さを生かした充実した環境づくりが大切。来園者が快適に過ごせるよう、日蔭を作るとともに、レストラン以外での冷暖房施設があればよい。動物に関する最新の本や映像等を備えた図書館や博物館的な役割を果たす空間を作ってほしい。
- 動物園の役割や位置づけを明確にした方がよい。今までは単にレジャー・憩いの場であったが、子どもたちに命の教育をする場としてほしい。また、観光資源として、ピースやアフリカゾウなどの物語を発信してはどうか。私は遊休地を利用して地域の方々とサツマイモをつくり、アフリカゾウのえさとして提供しているので、地域が支える動物園という物語も作っていただけたいと思う。さらに、オス象を迎えるためにも飼育環境の整備は重要。そして私たちも自治体に要望するだけでなくできることで動物園を支えていきたい。

- ・地元の住民として、連休中や夜の動物園の時の道路の渋滞は深刻。砥部町を訪れる観光客は動物園までは来るがそこから奥までは来てくれないので、地域で方策を検討している。近隣の住民が散歩がてら来られるよう、平日だけでもゲート前までバスや車が入れるようにできないか。県外の観光客のリピーターを増やすことが重要。HPは、見やすくよくできており、県外の観光客には有効だと思う。

#### 質疑応答

Qシベリアにホッキョクグマの孤児は多いのか。

A非常に増えており、オイルまみれで見つかる子グマもいる。

シベリアの収容施設にも限りがあるため、収容先が決まらな  
いと保護できない。アラスカ動物園からとべ動物園に相談し  
ていると思う。

Q日本の動物園が保護するに当たり、規制があるのか。

A様々な規制があるようだが、アラスカ動物園としては、突破  
できると考えているようだ。

Q今の子ども達は、動物だけでなく自然の木々や植物などに触  
れ合う機会が少ないため、動物園で取り組んでほしいと考える  
がどうか。

A動物園は、自然を切り取った状態であるべきと考えるので、  
植物もあつた方が良く、知る場所であつてほしいと思う。

Q駐車場からゲートまでが遠いと感じるのは、つまらないから  
ではないか。園に入るまでに動物に触れ合うなどの工夫をす  
ればよいと思うがどうか。

Aいろいろ工夫はされていると思う。日曜日に家族そろって訪  
れる場合は、特別な日の特別なこととしてゲートまでの道の  
りも楽しいと思うが、近隣住民、例えば孫の面倒を見ている  
高齢者などが、平日の午前中などに散歩感覚で訪れるという  
ことを考えると、やはりゲートまでの距離が遠く感じる。そ



して、こういう近隣のリピーターを呼び込むことが来園者の増加にもつながると思う。

#### 総括（鈴木建設委員長）

本日お越しいただいた皆さんは、とべ動物園を愛する方々ばかりだなと感じた。アラスカ動物園との関係、また、日本有数の高い繁殖技術を持つとべ動物園にぜひアフリカゾウのオスを、というようなお話をお聞かせいただいた。また、殺伐とした社会の中で動物園に来て元気になったという声もいただいた。さらに教育や福祉分野と連携することで動物園の役割が重要視され、実行力が増すというご意見は非常に良かったと思う。整備の面では、駐車場からゲートまでの件など様々な意見があったが、1つからでも着実に実行し、皆さんと一緒に、とべ動物園を観光資源や癒しの場、またご意見にあった、投資をしたら収益が得られる、財政的に豊かになる拠点にしていきたいと思いますので、今後ともご協力をお願いしたい。

#### 会議の様子





文教警察委員会

開催日	平成 28 年 7 月 13 日（水曜日）
開催場所	今治市役所第 2 別館 11 階特別会議室 3 号・4 号
テーマ	高校教育における地域産業に根差した人材育成について
参加者	<p>地域代表者</p> <p>愛媛県立今治工業高等学校長 西岡 誠  今治明德高等学校長 濱元 一馬  愛媛県立今治高等技術専門校教頭 一色 隆志  愛媛県立今治西高等学校 P T A 会長 田中 克尚  今治市 P T A 連合会顧問 田中 健司  今治商工会議所専務理事 松本 義秀  越智商工会事務局長 豊嶋 博  今治地域造船技術センター会長 森 克司  越智今治農業協同組合人事課長 安永 陽子</p> <p>文教警察委員会委員  総務企画国体委員会委員（オブザーバーとして参加）</p>
質疑内容	<p>地域代表者からの声</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 県立の工業科設置校では、次代を担う地域産業技術者育成事業などに取り組んでいる。  今治工業高校では、地元の要望を受けて今年度から機械造船科を設置し、文部科学省から指定を受けたスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（S P H）の取り組みを他の職業高校にも普及・展開することで、本県職業教育のさらなる充実につながると考えている。</li> <li>・ 今治明德高校では、卒業生の 7 割近くは県内に残っており、地域との密着は多い。県立に負けないよう先生ともども頑張っているところだがなかなか大変。  総合コースを設置しているほか、美容コースは全国で 7 校しかない中、施設を学校に唯一備えている。</li> <li>・ 今治高等技術専門校では、地場産業を支える訓練科目を編成している。  企業から今後を担う若い人材が足りない、育たないという話が出る。高校卒業後の環境ギャップをできるだけ少なくし、より長いスタンスで仕事と付き合っていける心構えが養えるよう学業と産業のつなぎ役の役割を果たすことが一番だと考えている。</li> </ul>

- 今治西高校は、ほぼ7割が国公立大学を目指す進学校で、ほとんど市外や県外に出ていく。  
今年度、地場産業の研究を通して自己向上に取り組む授業を始め、地元にあるグローバル企業を訪問し、生の声を聞き、実際の仕事の現場を見学している。グローバルの視点から地場産業を見ることで郷土愛の意識を持つ機会になると思う。IT化に伴い地方でもグローバルに活躍できる企業に勤めることができ、自分自身で起業することもできてくるのではないかと期待している。
- 今治は進学を希望する親御さんが多い土地柄だと感じている。  
今治市が国家戦略特区に選ばれ、獣医師系大学の設置構想が動き出しており、地元高校との高大連携を中心とした取り組みが地域性に合うのではないかと思う。  
大学に授業に行くだけでなく、大学の先生が高校に授業に行くといった履修科目の整合性を図り、高校生の向学心を上げていく取り組みが必要ではないか。獣医師を目指して地元に残る、地元を愛して今治に定着する若者が出てくるのではないかと思っている。
- 商工会議所では、造船進水式の見学会、JAPANブランド育成支援事業、地域雇用促進協議会の大きく3つの事業を行っている。  
地場産業をより理解してもらうため、昨年度から高校生対象の造船所等の見学会を企画し、進水式見学会を、本年度は昨年度の2回から4回にと思っている。  
高校への要望として、知識のみならず歴史に学んでいただき、地盤産業をどういった先人が育て、守り、今日に至ったか、身近なところの先人・先輩を掘り起していただき、教えてほしい。知識のみならず心の教育といったことで、郷土愛が生まれると考える。
- 商工会で会員企業の労働保険手続きを行う中、若年労働者の短期間での離職が目立つ。技術習得に期間と費用をかけているところでやめてしまう。また、転々と職を変えてしまう。社会の一員としての自覚がない、コミュニケーション能力が低いという声も聞こえるが、少子高齢化などで、企業の成長を支える中核的な人材の不足を招き、培われてきた技能が次の世代に継承されない可能性がある。  
教育機関だけに頼るのではなく、家庭での教育も重要であるし、行政、企業、地域が一体となり社会人、職業人として自立できる能力を育てることが求められていると思う。
- 今治地域船技術センターでは、12回目の初級研修の修了を先日終え、延べ千人超の修了者を出している。工業系の知識のない新入社員に造船の基礎的スキルを、最終的には技能資格を集中的に取得してもらう役割を果たしている。当初は団塊世代大量退

職の2007年問題を抱えた中で企業の枠を超えた組織として設立され、技術継承と定着率向上をテーマに掲げてきた。現在は、初級研修に止まらず中級研修、専門技術を磨くことにも取り組んでいる。

高校から数多く就職していただき、会社としても継続した採用活動が続け、南予についてはかなり定着し、就職先として考えていただくまで実績が上がっている。

- ・越智今治農業協同組合では、農業と地域の暮らしをどう支えていくかを軸に、この3か年農業所得向上と地域活性化に向けて全力を尽くすことをテーマとしている。

農家人口の減少、高齢化の中、直売所や商業施設への出店の事業展開とあわせ、高齢者の農作業支援や耕作放棄地対策、新規就農者育成に取り組んでいるほか、最大のサービスは職員の資質向上ではないかということで、熱い志を持って職務に取り組める人材育成にも積極的に取り組んでいる。

高校からも毎年入社いただいております、話の出ている地学地就や歴史から地場産業を学ぶことでの心の学習など、農業や地域に関心をもち、志をもって仕事をしていける生徒を教育面から支援していただき、地域全体で今治が活性化できるような仕事をしていけたらと思っている。

#### 質疑応答

Q 若年労働者の短期間での離職の原因などを把握されているようならお聞きしたい。

A 少しきつい指導をするとすぐにやめる。少し給料のよいところへ変わってしまうといった話を聞くが、時代ギャップ、年代の違いというのはあるのかもしれない。

Q 高校として企業の求める人材の把握に取り組む中で、現場としての考えや意見はどうか。

A 教員がまず地元企業を知ることから始めたが、企業との日程調整や訪問趣旨を理解してもらう方法などに迷うとの話も出ていた。まずはスゴ技データベース掲載企業からということで実施した。

Q 商工会側からもっと学校に企業を知ってもらいたいとの話が出たが、本日がよい機会になるのではないか。

A 今治地区雇用促進協議会の取り組みで企業と高校のコミュニケーションはとれている。このような組織づくりがほかの地域でもあればよい。雇用の充足は県下全域で考えなければいけな

いことで、協議会では全県下の進路指導主任の先生に集まっていた。

Q 歴史を学んでほしいとの話があったが、高校のみでなく小中の新任の先生も含め地元を知っていただく取り組みを考えてみてはどうか。

A 生徒に対しては社会学習で地域の先人に学ぶ、地元の歴史を掘り起こすといった時間を割いていると思う。

Q 高校側に企業・職人のすばらしい技術に対して憧れのようなものが常蓄される雰囲気があるかどうか。

A 体験したり直に触れたりといった一歩踏み込んだ形の見学会を進めている。今治工業高校の造船コース、SPHの取り組みはまさにそこだと思っており、憧れを1年生から持たせ、その仕事につきたいという方向へというのがコース設置の目的のひとつ。

Q 高校でのインターンシップの取り組みはどうか。

A 私立高では人員、教員の確保などが大変である。県立高では、キャリア教育の一環として期間差はあるが実施している。期間を長くすれば効果はあるが、時間等の問題でそこまで行けていないのが現状。デュアルシステムの取り組みも企業側の都合等もあり数は少ない。

Q SPH事業はどのような事業か。

A 地域との連携も含めた上での高度な就業人の育成に取り組んでいる。その中で高大連携などもできるだけ活用をというような趣旨の取り組みである。

Q 私立校の美容コース卒業生の状況はどうか。

A 国家試験合格率は高いが、今治は美容室が多く、合格後は各地に就職している。南予の高校も同じだが、過疎化で生徒数が減少し、何か歯どめをしないといけない。

Q 私立校の耐震化が地震の影響で遅れたとのことだが、命・安全を守るのは県立も私学も同じであり、見通しは。

A 10月頃には着工できる見込みである。

総括（徳永文教警察委員長）

環境が変化してもやっていける、自立ができる人格の形成にしっかり対応しなければならないことがよくわかった。仕事を選ばなければある時代だが、政策的にどう誘導していくかといったことを真剣に掘り下げて考えなければならないと思う。

また、今治工業高校のSPH指定に目が向いているが、農業人材の育成に現在の農業大学校や県立高校のカリキュラムでよいのかなど、ここで完結するわけではなく、きょうが出発だとの感覚で掘り下げ、検討していただいて、お話を聞かせていただき、活動したいと思う。

会議の様子

